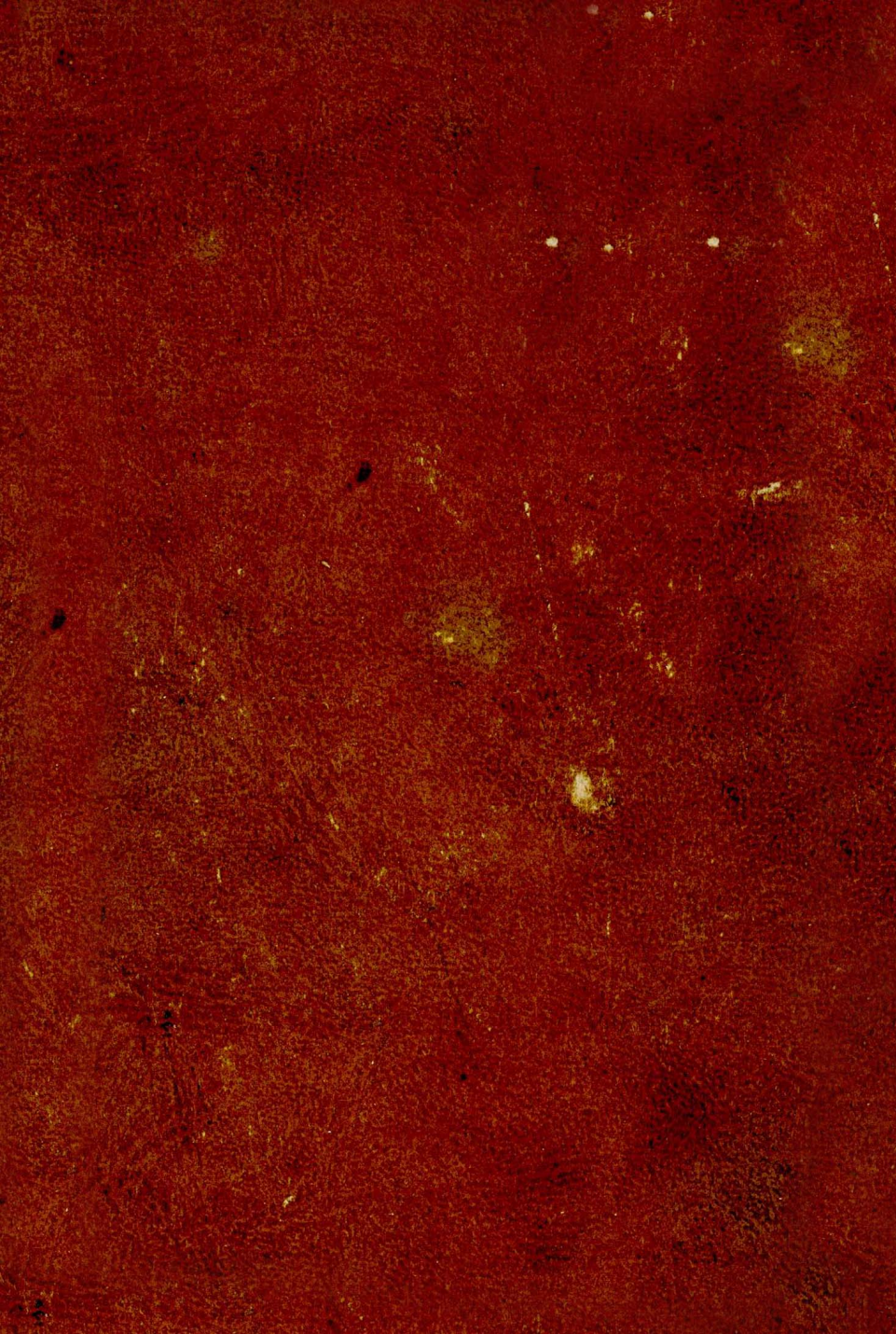






雁 歸 る

水
上
勉

徳間書店

雁帰る

©一九六七

昭和四十二年三月二十五日 発行
定価四二〇円

著 者 水上 勉

装幀者 朝倉 攝

発行者 徳間康快

印刷所 三秀印刷

製本所 大口製本

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇

電話(四三四)六一九一・六

振替東京 四四三九二

乱丁・落丁本はお取りかえいたします。

検印随止

目次

I

雁の話

わたしの子供の頃

じじばばの記

爺取る婆取る 釈迦浜 桑子 まいまいこんこ

母

嵯峨野慕情

一

二

三

四

五

六

II

陽かげの青春

ああ京の五番町

青春放浪

枯野の人

III

雁帰る

足をつつむ

カチ栗正月

除夜の鐘と四句誓願

私との対話

放浪と失意

「フライパンの歌」の頃

九

九

二六

一三

一六

一五

一四

一七

一三

一五

一七

忘れえぬ風景

一八〇

護国寺の墓地

一八一

わが愛の記

一八二

冥途の入口

一八三

私の書きたい男

一八四

IV

絶壁の地の果て・親不知

一八五

北冥の地・下北半島下出

一八六

近江寺の湖東三山

一八七

海のある奈良

一八八

奥能登の海石

一八九

初稿発表覚え書

一九〇

装幀・題字 朝倉 攝

I

雁の話

雁の話

笛や太鼓にさそわれて
山の祭りにきてみたが

日暮れはいやいや里恋いし
風吹けや木の葉の音ばかり

母さま恋いしと泣いたれば
どうでもお泊りねんねしな
泣く泣くお瀬戸へ出てみたら
空には寒いあかね雲

かり、かり、先になれ竿になれ
おむかえたのむというとくれ

小さい頃、誰から習ったものか。母だったか、隣家の人だったか。背中におわれたり、手をひかれ
たりして歩いた山道で、うたってもらった。子守唄である。誰の作詞かも私は知らない。そして、い
ま、ここに書いた唄の文句も、いくらかちがつているかとも思う。しかし、今日四十八歳になった私
は、何げない時にでも、口をついて出るこの唄を好むのである。まちがっているかもしれない唄だけ
れど、つまり、私流に、ふしまわしをつけて、私流の文句にして歌う。

かり、かり、先になれ、竿になれ、というのは雁のことだろう。そういえば、私の育った若狭の村
は、よく雁が通った。

山の奥は近江の琵琶湖になっていた。むかしから、北近江には、雁が年じゅう棲んでいて、時たま、
若狭の山をこえて、私たちの村をわたったのかとも思う。母は山の奥の汁田もじりで働いた。私たち子供は、
夕暮れになると、よく山の田の畦へ出て、母が泥田からあがつてくるのを待っていたものであった。
そんな時、せまい谷の空を雁がわたった。

たいがい、雁は十羽ぐらいのむれをなして、への字にまがっていた。谷の空は、屏風のような山が
天へぬけていたから、田圃よりもせまくて、まるで帯のようにほそい。そんな空を、雁がわたったの
は、ほんのわずかな時間であった。あッ、雁がゆく……と違って、兄や弟に指さしてみせても、すぐ
に空を仰ぎ直すともう雁はいない。黒い山の肌へ吸いこまれているのである。山の肌へ消えるのだけ
らして、羽音もきこえはしない。もちろん、啼く声もきいたおぼえはない。雁は、風のようにあらわ
れ、風のように、ふわふわと山に吸われた。

後年になって、私は都会で暮すようになったので、秋がきても雁のわたるのを見ることがなくなつた。だが、雁をゆつくりまじかに見たのは都会の動物園であつた。上野であつたかと思うが、水鳥がいっぱい飼つてある大きな池のまわりに、雁は、けばけばしい水鳥たちが泳いでいるのを眺めながら、隅の方で、しょんぼりと、うずくまるように二、三羽がたむろしていた。よごれた羽だつた。愛嬌のない仏頂面をしていた。眺めていて私は失望した。

いま、手もとにある百科事典をひいて「雁」の項をみると、

「秋の夜むれをなして渡るので名高い雁は、ガンカモ目ガンカモ科にぞくしている。軀はかなり大型で、くびは長いが、くちばしは頭よりみじかく、カモ類とことなり、雌雄同色、換羽は年一回秋に行う。多くは北半球の北部に繁殖し、秋に南方へわたる。とぶ時は横列またはカギ形でとぶ。湿原、耕地、沼、潟などに群生し、泳ぎも巧みで、地上で採食する。食物は雑草、穀類、野菜など。日本に渡来するのは、サカツラガン、マガン、ヒシタイなどで、むかしは、頭とくびの部が黒色で、頬に白まだらのあるシジュウカラガンなどがたくさん渡来したものが今日ではきわめてまれにしかみかけない。ガンは、肉量はゆたかなので、美味なうえ、羽毛は工芸品につかわれる。むかしから猟鳥として尊ばれ、いろいろな狩猟法が考えられた。タカ狩り、網捕獲などあるが、埼玉県ではハwanaVによつて獲つた。雁には狩猟が禁じられているものと、禁じられていないものがある。雁は去来期が正確であるから、代表的な渡り鳥とされ、俗に、秋の彼岸におとずれ、春の彼岸に去るといわれる。陰曆八月をハ雁来月V陰曆九月に吹く風をハ雁渡しVハゲイトウをハ雁来紅Vとよぶのは雁の習性に由来している。ハ雁書Vハ雁信Vハ雁札Vというのも、前漢の將軍蘇武が匈奴に捕えられ、雁の足につけて放し、

故国に便りをしたという故事からきたもので、これも渡り鳥の習性に発したものであらう。△雁行▽
△雁木▽は雁のとんでゆく形からうまれ、△雁木だな▽はちがい棚の一つである。紋所の△雁金▽も
△飛雁▽も△糸巻雁金▽もすべて雁行からきている。」

動物園の雁をみて失望した私も、この百科事典の文章をうつしているといろいろと空想がわいてく
る。埼玉県で行なわれる△わな▽はどのような方法なのか知らないけれど、九歳までいた若狭で、冬
の日に一羽の雁を獲った記憶がある。

十二月か一月はじめだったかと思う。たまに、季節はずれの大雪に見まわれた年で、山も田も若狭
は白銀一色にぬりつぶされていた。山で獲物がなくなつた鳥どもはすぐ野へ下りてきた。これをよぶ
ために、私たちは、田の雪を掘り、一尺四方ぐらいの土をだした。そこに釣針にみみずをとりつけ、
糸にくくって放つておく。雪が降つてくると、山から、田から、無数といつてもいい鳥が、掘り穴を
めざしてやってくる。それを、しばらく見すごしておいてから、程たつた時間に、走りよつて、鳥を
追うのだが、釣針をくわえた鳥がのどをとられて羽ばたいているのを私たちは掴みどりにするのだつ
た。そんな鳥の中に、頬を白まだらにした、カモとも、ハトともつかぬ得体の知れない一羽をみた時、
私たちは、どきりとした。鳩より大きくて、妙に肉づきがよかつたからである。いまから思うと、△シ
ジュウガラガン▽だったのだらうか。

さきにもちよつとふれたが、渡り鳥の雁も、若狭の南の北近江へゆくと、年じゅう湖岸の葦の間に
棲息するとみえ、春も夏も冬も、親雁が子雁をつれて水あそびをしているということだった。これな
どは、そうすると、どういう雁の種類にぞくするのだらうか。

アンデルセンの「みにくいあひるの子」にも雁が出てくる。あのあひるの子が雁と出あう章をよんだ時、私は涙をおぼえたことがある。あひるの子は親にはぐれ、冬の沼べを放浪していくのだが、猟師に追われてひそんでいる一羽の雁にかたりかけられる。私はいまでもあのくだりが好きだ。

九歳で私は京都の相国寺に小僧として入ったが、私を得度させてくれた瑞春院の方丈には、雁の襖絵があった。十数羽の雁がやはり沼のふちであそんでいる風景で、それはのどかにもみえたけれど、墨一色でもあったので、どことなく淋しくみえた記憶がある。親雁もいた。子雁もいた。のちに私は、「雁の寺」という小説にこの襖絵を借用したのであるが、小説に出てくる、母親雁が子雁に餌をふくませる絵はなかった。これは、私の空想の雁だった。

しかし、あの小説の中へ出てくる襖絵には、大きな松の木があった。それにとまっている雁もいたと私は書いておいたのだが、ある読者から手紙がきて、雁は木にとまらない、といってきた。湖のそばに、松の木が生えていて、それが、まるで、水の上を這うように、枝をさしのべている。寺の池のそばにも、そのような古松はあったので、私は沼べに松が描かれていたと書いておいたのだが、真に、雁は木にとまらないものだろうか。とすれば、こちらの苦しい弁解にすぎないことになる。だが私は、どうしても、水の上を這う古松の枝へとまった雁に愛着があるので、そのところをいまだに訂正する気になれない。

近江の雁を若狭でみたと言いたけれども、九歳で村を出た私には、もう、せまい谷を走る雁をみることはないのかもしれない。東京にきた私は一どだけ、への字に列をなして空をゆく雁をみたことがあった。それは昭和二十一年の頃で、東京は空爆の傷痕をそのままにして、荒涼たる焼野っ原であっ

た。そここに出来た闇市場には、いかがわしいスイトンやしるこを売る屋台店があつたが、その一軒で、味もそつけない章魚の足にはくついていた時、屋台のすだれの向うの空を、数羽の雁が夕陽をうけて、うぐいす色に光って、宮城の森へ消えてゆくのをみた。秋だった。まだあの頃の東京には、雁がわたる池もみどりもあつたのであろうか。それ以来、私は、もう二どこの都会で、雁をみたことがない。

とすると、冒頭にかいた、かり、かり、先になれ、竿になれの唄も、私にはもうはや、現実ではみられぬ雁に、唄の中であうしかないという気持がかさなるのかもしれない。唄の中の雁はいやに鮮明にうきあがる。

笛や太鼓にさそわれて、山の祭りにきてみたが、というのも、都会からきた子供をさしているのだらう。都会の子が山の村へきて、私の夕暮れの淋しさに、母親恋しと泣いたのであらう。瀬戸の戸をあけてあかね雲をみていると、雁がわたっていく。おむかえたのむというくれ、と子は雁をみてうたうのである。前漢の蘇武の心も同じであつたらうか。騒々しい東京に暮していても、秋がくるとそろそろ若狭の空に雁がわたる頃だと私は思うのである。母の姿がそれにかさなつてしかたがない。

私は雁を恋うて生きているのかもしれない。

わたしの子供の頃

1

生れた家は、福井県大飯郡本郷村字岡田というところにあった。日本海辺にのぞんだ若狭湾の谷の奥である。どういうわけか、私の家だけは、人家の集まっている部落から、やや離れた「乞食谷」という谷の口にあった。コジキダンと村の人はよんでいた。なぜ、そんな恥しい名称で、私の家のある地籍が村人によばれていたのか、理由は今日になってもわからない。

ずいぶん、粗末な家で、藁ぶき屋根の入母屋造りではあったが、むかし、ここは、地主の林左衛門という家の木小舎であったものを、大工の父が改築して、私たち一家を住ませたものときいた。

父は大工だったが、自分の家だけは、荒れるままにしていた。紺屋の白袴ということを後年になってきいたが、父もそういう性格の男だったのだろう。むかしは木小舎だった家だから、壁もなく、家の周囲は板囲いだった。その板も、他家の普請場からもってきたもので干燥する間をあずかったものらしく、時がくるとどこかへ持ち去られた。だから釘が打ってなく、たてかけて縄でゆわえてあった

ことをおぼえている。冬になると、雪風がスキマから吹きぬけた。一夜じゅうふとんがしめった。私たち五人兄弟は、母に守られてこの寒い家で大きくなった。

母は、部落でも長者であった堀口文左衛門という家の次女に生れているが、文左衛門が没落したので、京都へ女中奉公に出ている、十九の時に、寺大工の父と恋愛して、水上家へ嫁してきたといった、乞食谷の寒い家へきた時は、淋しくて、何とか、祖母の家へ逃げ帰ったことのちになって私に語っている。

父は覚治といい、自分の家は荒れるままにしておいて、他所^{よそ}の家の普請ばかりしていたが、チョンカラコ（バクチ）が好きで、ついぞ、夜など、家にいたことがなかった。遠い普請場へ出かけた時は、二カ月も三カ月も帰ってこない日があった。母は、んでもない男の所へ嫁にきたわけだった。しかし、いったん、心を決めて来たのだから、逃げ帰るわけにもゆかず、私たちを育てることにその生涯をかけたのである。

水上家には、母がきた時は、祖父は死亡していたが、盲目のいしという祖母がいた。この祖母は小豆^{あずき}のサヤで眼をついたのがもとで全盲だった。しかし、七十二歳まで生きたが、晩年は、孫の私を背中におんぶして「村あるき」という小使いをしていた。部落に葬式が出たり、祭りがあったり、入営者があったり、嫁取りがあったりすると、いちいち、それをふれ歩くのが仕事であった。私は、全盲の祖母の手びきをつとめた。手びきといっても先を歩いてゆくのではなくて、祖母の背中について、道を教えたのであった。村の道は石ころが出ていた。わきを深い川が流れていて、そこで、米をといだり、茶碗を洗ったりするのが、部落の慣習だったが、私は、祖母が、この洗い川へ足をふみすべらさ